

# インド留学記

その10

## 祈りと改宗



研究会 方任 研究員  
東専 保 坂 俊 司

### 祈りと改宗

さて、今までヒンドゥー教における祈りやイスラーム教における祈りについて色々考察してまいりましたが、今回は、これらの宗教の祈りを多少違った面から考察しましょう。

インド亜大陸（以後原則としてインドという場合は、インド亜大陸をさす事にします）に、ヒンドゥー教系の宗教における祈りの形態（ここでは特に祈りの形態をさす事にしますが）と

は異なった祈りの形態が、組織的に齎らされたのは、西暦七一年にシンド地方を征服したイスラーム教徒によってであった。イスラーム教は周知のように、七世紀の始めアラビア人のムハンマド（一般にはマホメッド）によって始められた新宗教でした。この宗教がインドに知られるようになったのは、早くも六三六年のシンド地方への遠征によってであるといわれています。しかし、その当時は単なる掠奪が主で、イスラーム教の信仰を布教しようという事はな

かったといわれています（もつとも、このイスラーム教の出現によって、ヒンドゥー教徒の間に間接的には大きな影響を与えたことは事実です。この点に関しては後に詳しく論じましょう。）。ところが、世界宗教とよばれるイスラーム教は、本来改宗の宗教です。ですから、その初期において世界中に侵略活動を行なったイスラーム教徒の活動の目的の一つは、この新しい宗教の伝播にあつたといわれてもいるのです。

これは言葉を替えれば、他宗教からの改宗者を募ることを目的としていたということです。従いまして、七二年にシンド地方の征服にやつてきたイスラーム教徒も、その様な意図を持っていました。

この遠征時の記録は、インドのイスラーム教徒の間には有名な資料によって克明に記録されて今日に伝えられています。その時、このイスラーム教徒を率いていた將軍であるムハ

マド・カーセムは、戦いは最後の手段であるとして、現地のインド人達に降参を呼び掛け、またイスラーム教への改宗を盛んにすすめています（この時は強制はなく、彼は、税金を払うことで現地の宗教の存在を認めていた）。もつとも彼の場合は、後世のイスラーム教徒がインドでおこなつたような乱暴な弾圧はほとんどありませんでした。その時、インド人の中に多くの改宗者が出たのですが、その多くが仏教徒であつたということが、記録によって明らかとなつています。それについては東方学院の機関誌『東方』六号に紹介しましたので、ここでは触れません。しかし、ここにインド人によるイスラーム教徒が出現したことは、今日インド（パキスタン・バングラデイシュを含めた地域）において三億人強のイスラーム教徒が存在する事実と関連して考えると、大変興味深いものがあります。つまり、八世紀の初頭にほぼゼロであつた

イスラーム教徒人口は、一千二百年後の今日、三億人強の人口に膨れあがっているのです。これは、とりもなおさず、多くのインド人がイスラーム教の祈りを受け入れたということを意味しています。勿論、この中には、インドへのアラブやペルシャといったイスラーム教圏からの移住者も含まれていますが、その数は一割にもならないといわれています。また、インド人がイスラーム教を受け入れたその経緯についても、政治的な圧力や、経済的な利点を求めたというような純粹に宗教的な要素以外のものもあったことは事実です。しかし、そのような改宗者はむしろ少なく、多くはイスラーム教に何かしらの魅力を感じて改宗したのでしょう。勿論、インドにおいて改宗は、個々人の問題というよりも、社会や集団の問題となるので、集団改宗という形態をとることが多かったのです。しかし、改宗の経緯はともあれ、一度イスラーム教

の祈りを心から受け入れれば、絶対者アッラーへの絶対的な仰敬と畏怖の念が、心に満ちあふれてヒンドゥー教とは異なった祈りの世界に埋没してゆくのです。

今日、インド亜大陸のパキスタンやベンガラ、デイスュといったイスラーム教国家は勿論、インド共和国においてさえ、イスラーム教徒の存在は大きなものです。毎週開かれる金曜礼拝の時、巨大なモスクを埋め尽くすイスラーム教徒の祈りの姿は、何万という信者に一人として乱れなく、まさに驚異的の規律によって成り立っています。それは、ヒンドゥー教のような、自由な祈りの形態を持つ宗教とは明らかに異なります。